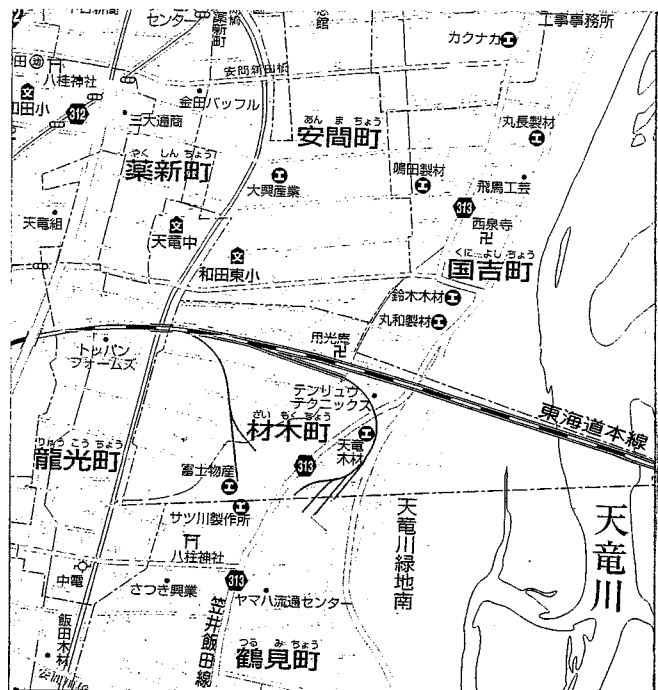
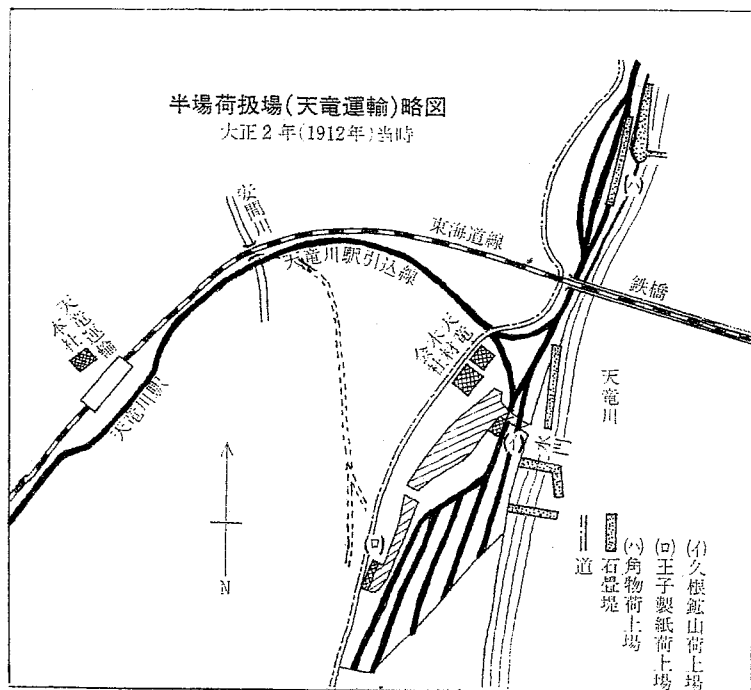


I 天龍運輸発祥之地

碑をお読みください。現代文
で分かりやすいです。



古来、天竜川中・下流一帯は、天竜川水路を物資輸送の幹線として次第に発達してきた。それに伴って掛塚港も次第に栄え、明治時代に入ると貨物の集積はますます盛んになり、千石内外の船が670隻も出入りした。

明治25年、東海道鉄道の開通を機に設立された⑩天龍運輸会社の隆勢につれて、沿岸貨物の集積は次第に⑩天龍運輸会社の半場荷物扱所に移っていった。半場荷物扱所は、天竜川駅から2km近くの引き込み線設備(上図)によって、水陸両用の便を計った。天竜川流域の薪炭・杉皮・林産物(茶・椎茸など)・木材・製材加工品はここから東西両市場に輸送された。王子製紙中部・気田両工場の製品、久根銅山・峰之沢鉦山の鉦石の運輸も拍車をかけた。この引き込み線路は半場地内に多くを占めるので、半場線と呼ばれていた。線路の長さが1里半に及んだ。開設当時、民間では最大級の規模であった。天竜川駅取扱貨物量は、大正から昭和初年にかけては、全国鉄道駅中、浜松駅を抜いて第7位を占める程になっていた。

昭和8年天竜川に鉄橋(国道1号線)が架設されたころから、自動車輸送が急速に発達したことや王子製紙の閉鎖などから水路輸送は、漸次衰えつつあった。昭和12年東海道支線二俣線が開通し、天竜川流域の東西輸送の基点は二俣・西鹿島に移った。(参考:竜光町 佐々木 茂著書)

II まるがた通路 (資料は浜松中央図書館所蔵)

東海道鉄道複線化の測量が確定した段階で、沿線の関係町村民代表者が鉄道局へ請願書「東海道鉄道複線化に伴う隧道・橋梁の設置願」を提出している。この請願が受け容れられ「まるがた通路」が建設された。文明開化を積極的に進めてきた時代である。西欧の半円アーチ型レンガ造りの隧道(トンネル)が、当時のまま残されている。次ページ以降の資料をごらんください。

同県同郡和田村

伊藤 増吉 印

同県同郡飯田村

高橋 啓次郎 印

同県同郡芳川村

柿沢 山次郎 印

同県磐田郡掛塚町

伊達 常次郎 印

同県同郡同町

戸田 勇吉 印

同県浜名郡芳川村

磯辺 彌吉 印

同県同郡和田村

大須 賀周吉 印

同県同郡飯田村

大塚 幸八 印

同県同郡和田村

渡瀬 徳三郎 印

同県同郡同村

安間 十郎 印

同県同郡天王村

伊藤 甚平 印

同県同郡同村

袴田 卯吉 印

同県同郡市野村

齋藤 弥吉 印

同県同郡同村

斉藤 安蔵 印

同県浜名郡豊西村

内藤 佐七 印

同県同郡笠井町

田中 文太郎 印

同県同郡同町

高井 源内 印

同県同郡笠井町

鈴木 清一 印

同県同郡同町

嶋田 嘉平 印

同県同郡豊西村

松島 十湖 印

同県同郡中ノ町村

山下 直平 印

同県同郡同村

川村 直次 印

同県同郡和田村

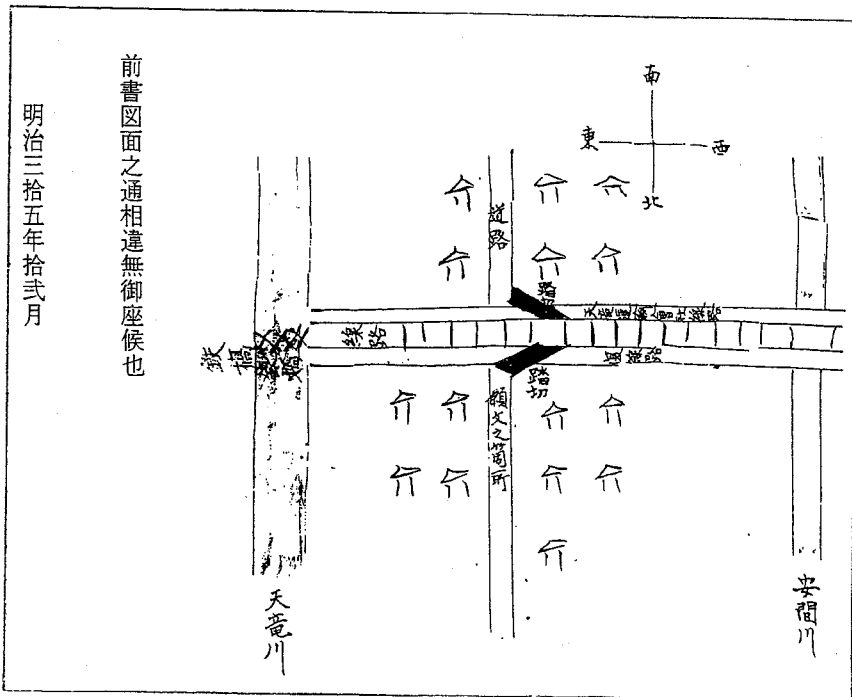
金原 明德 印

前書之通り相違無之候也

明治参拾五年拾貳月拾八日

静岡県浜名郡和田村

村長 村越 伊七 印



前書図面之通相違無御座候也

明治三拾五年拾貳月

鐵道局 御中

隧道若シクハ橋梁御願

東海道線路複線測量確定相成、当村線

路八百六十四哩ノ内踏切高數十尺ニテ

農・工・商及旅人・車馬等ノ通行困難少

カラス、就イテハ道路北部姫街道及笠井

町、南部掛塚港ニ接続シ、其他貨物運搬

等ニ付踏切數十尺ノ昇降被害堪カタク、

最天竜川ヨリ安間川間二旧道路四筋ノ

処唯踏切一筋ニ相成、此儘複線御建築

相成候時ハ、線路左右耕地反別広

大ノ收穫減額訂正出願ニ及フ場合ニ立至

リ、從テ生活上顯響ヲ生スルハ

勿論ナリ、且列車通行ノ危険免レカタク

關係村民悲嘆ニ堪ス、日夜痛慮致居候

間、因テ右道路ニ隧道若クハ橋梁別紙図

面ノケ処ニ御設置相成度、特別の御

詮議ヲ以テ願意御採用被成下度、關係

村民總代連署ヲ以テ此段奉願候也

明治參拾五年拾貳月拾八日

静岡県浜名郡和田村半場

鈴木久次郎

鈴木利七

鈴木芳太郎

鈴木清藏

鈴木八十恵

鈴木七藏

鈴木角藏

内田甚四郎

鈴木想七

田村忠五郎

田村富吉

田村善七

田村與平

鈴木兵藏

伊藤平六

鈴木李次郎

鈴木政七

鈴木吉太郎

鈴木条治郎

鈴木治郎吉

伊藤灌藏

鈴木源次郎

鈴木甚作

鈴木米太郎

内田菊次郎

鈴木藤吉

同県同郡飯田村

伊藤長吉

鈴木源次郎

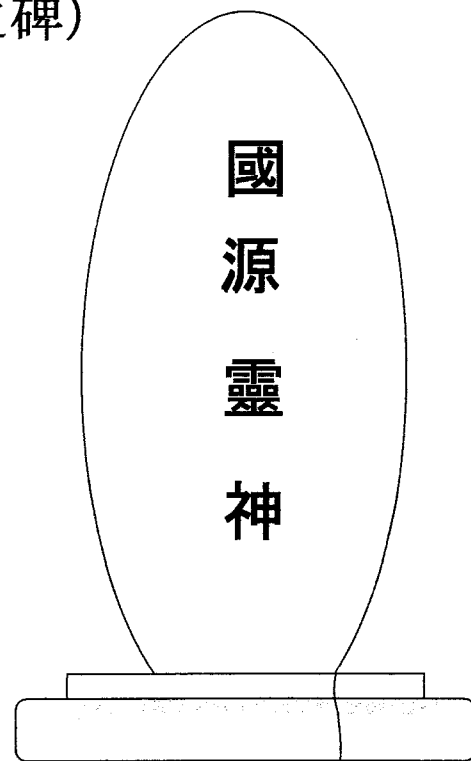
Ⅲ 國 源 靈 神 (故小國源一郎之碑)

國源靈神の碑は諏訪神社鳥居の左側の位置に、明治43年に建立された。

諏訪神社は慶長年間(1596~1615)の創立。

周智郡の小国神社からお迎えした。小国神社の祭神は大己貴命(おおむなちのみこと)。大己貴命は大国主命(おおくにぬしのみこと)の別名で、国づくりの神様。

諏訪神社は太政官の令達により、明治9年に北島村八柱神社(現薬師町)に合祀したが、同年13年許可を得て同地へ復旧した



國源靈神の国源は「国づくりの源」の意である。靈神(れいじん)は靈驗あらたかな神、即ち人々の祈りを叶えてくれる不思議な力を持った神の意である。

人々がこれほど源一郎を崇めたのはなぜであろうか?

半場生まれの源一郎は、明治14年ごろ木材加工を始めた。当時の木材加工は、木挽き職人による手工業であった。従来の手工業から動力機械による、より生産性の高い木材加工へと努力を重ねてきた。製材業発展の立地条件を満たしている当地において、今後の発展への期待が源一郎にかけられていた。しかし、源一郎は30才代の若さで生涯をとじた。この興業店は、明治19年に金原明善に引き継がれ機械製材が開始され、さらに明治40年Ⓣ天龍木材株式会社創設へと発展していった。

源一郎のあまりにも短い生涯を惜しみ、偉大な業績を称え、明治43年「國源靈神之碑」が建立された。ますますの発展に大きな期待を寄せていた大勢の人たちの気持ちを、「國源靈神」の碑の裏面が語っているようである。源一郎は、製材業の発展の祖、あるいは林業発展の祖であると言われている。またⓉ天龍木材株式会社の創始者とも言われている。

なお、建立発起人の筆頭 高村小三郎も半場の人で、天龍製鋸株式会社の創設者である。

碑の裏面 (次ページ以降)